

重要性を増す ASEAN+3 エネルギー協力

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
常務理事 首席研究員
小山 堅

3 月 11～13 日、韓国・仁川において、ASEAN+3 のエネルギー協力に関連する各種会合（フォーラム等）に出席する機会を得た。エネルギー需給、石油市場、天然ガス市場、原子力等の多様な問題に関連して、ASEAN と日中韓の 3 カ国の政策関係者等が集って幅広く意見交換が行なわれる場であった。

ASEAN+3 のエネルギー協力は、2002 年 9 月に大阪で開催された第 8 回国際エネルギーフォーラム（IEF：産消対話）の場において、地域関係国エネルギー大臣級会合での議論で実施に向けた合意が形成されたことがその重要な端緒となった。その合意を踏まえ、地域エネルギー協力がフォーラム活動として本格的に立ち上がったのは 2003 年からである。筆者は発足当初の会合から参加し、これまで同地域のエネルギー協力に関心を持って関わり続けてきた。しかし、今回の会合参加は実は 2 年ぶりとなる。前回の参加は、まさに「3・11」の当日、ブルネイで開催された会合であった。会合の途中から、テレビで衝撃的な映像を目の当たりにした記憶が今でも鮮明に残っている。その会合以来、筆者自身は ASEAN+3 関連会合に参加することが叶わなかったが、久しぶりの会合参加となり、その意味で、また新たに印象を深くした点が幾つかある。

第 1 には、この地域のエネルギー協力が着実に安定し、成熟しつつあるとの実感である。エネルギー協力のための地域フォーラムの活動が 10 年を経過し、協力のための意見交換の分野がエネルギー問題の広い範囲をカバーするに至るまで広がり、それを、定例的な会合の中で着実に、冷静な議論ができるようになるまで関係が深まってきている、と感じた。地域協力を巡る議論の安定化・成熟化は、過去 10 年間の議論の積み重ねの成果であり、その意味で今後のエネルギー協力の一層の推進に向けて大きな資産となる。ただし、「成熟化」は時として、油断をしているとモメンタム維持・高揚の面では負の作用を及ぼすこともある。地域エネルギー協力のさらなる推進という重要な目標達成に向けて、関係国がこのフォーラム活動のモメンタム維持・強化のため、さらなる努力をしていくことが望まれる。

第 2 には、ASEAN+3 を取り巻く様々な環境が変化する中で、この地域のエネルギー協力を巡る課題が新たに浮上してきた点がある。過去 10 年間で、世界における、そしてアジア地域における中国の重要性は飛躍的に高まった。台頭する中国に向き合いつつ、地域協力をどう進めるかは、ASEAN+3 の場においても極めて大きな意義を持つ。とりわけ、中国との関係を巡って、地政学的な緊張もこの地域内に存在すること、とりわけ北東アジアの地政学環境がこの 2～3 年で厳しさを増していることは重要なポイントである。しかし、だからこそ、そのような状況下でも、共通課題に対応するためエネルギー協力推進は重要になっている。今回の会合においては、その意味で日中韓の間でも、あるいは ASEAN+3 全体の中でも、エネルギー協力を巡って落ち着いた、前向きの良い議論ができていたのではないかと実感した。

第 3 には、地域としての ASEAN の重要性が今まで以上に増していくという環境の下で、議論が深化している点がある。前述したとおり、中国のプレゼンスの増大については多言を必要としない。しかし、最近中国の重要性が高まればこそ、次の成長センターとして ASEAN 地域への注目が集まる、という面も現れている。また、ASEAN はインドネシア、マレーシア、ベトナム等に代表されるようにエネルギー資源の輸出地域という「顔」を有してきた。しかし、近年の急速な経済発展とエネルギー需要増大によって、インドネシアが既に石油純輸入国化したとおり、輸入地域としての「顔」を強めている。こうした大きな状況変化と高まる重要性の中で、ASEAN を巡るエネルギー協力の議論の重要性が高まっている。例えば、近年は IEA も ASEAN への関心を大きく高めており、今年の World Energy Outlook においては、ASEAN に焦点を当てた分析を行う予定ともされている。その意味で、ASEAN と日中韓がエネルギー協力を議論する場としてのこのフォーラム活動の意義は非常に高い、といえるだろう。

第 4 には、エネルギー協力推進に向けた個別トピックとして、筆者の目で見ると、現時点では原子力問題と天然ガス問題に大きな関心が寄せられているように感じた点が挙げられる。まず、原子力については、ASEAN+3 は、世界で最もダイナミックな動きが展開している地域の代表とあって良い。極めて大規模な原子力開発計画が進められている中国に加え、新規原子力国となる計画を着実に進めるベトナム、そして化石エネルギー輸入国化が必至である多くの他の ASEAN 諸国でも中長期的課題として原子力導入を目指す国が多い。他方、この地域では、原子力先進国として日韓両国の存在があるが、その日本において福島事故が発生、原子力政策の見直しが行われている最中にある。今後のこの地域における原子力開発計画にとって、いわゆる「3S」(Safety, Security, Safeguard) の 3 つの強化と達成は極めて重要な課題であり、そのためには福島事故の教訓を地域で共有することが必要になる。その意味で、原子力を巡る地域内での協力に関しては、関係国共通の問題関心が非常に高い状況にある。

また、天然ガス問題も重要な関心事項になりつつある。クリーンで資源量が豊富な天然ガスへの期待は、エネルギー需要が増大し、需給構造の高度化が求められているこの地域において、大きく高まっている。米国で進むシェールガス革命が ASEAN+3 地域にどのように影響するか、という関心もある。そして、近年大きな話題となっている LNG 価格のアジアプレミアム問題については、非常に高い関心が寄せられ、今回のフォーラム活動においては、極めて活発な議論が行われた。この地域内には、天然ガス (LNG) の輸入国も輸出国も混在するが、世界の他地域に比べて非常に高いガス価格の存在は、いわば地域共通の課題として、関係者の議論の対象となったとあって良いであろう。ある意味で、この地域のガス・LNG 市場の一層の健全な発展のためには何が必要かという視点からの議論であり、今回の地域エネルギー協力を巡る議論の中で最もホットでタイムリーなテーマでの議論となった。先般 IEA が報告書を発表した、アジアにおけるガス・LNG ハブ形成の問題も含め、この地域のガス市場問題には、世界から高い関心が寄せられている。その中で、地域協力の議論がどう進んでいくか、興味は尽きない。

このように、ASEAN+3 は、世界のエネルギー市場全体の中でも、極めて重要なポジションを占めており、その重要性がさらに拡大していく地域である。この地域のエネルギー問題に対応して関係国がどのような協力を進めていくのか、協力を巡る課題をどう克服していくのか、といった点は世界のエネルギー情勢を左右する一つの重要要因であり、地域関係国のみならず、世界全体にとっても重要な意義を有する。

以上